四、強情な侍

正保[註5]の頃、湯沢の武士に木朽という者があった。次男のこととて諸国を廻って暫らく津軽にとどまっていた。ある日友達が碁を打っているのを見て助言すること数回に及んだので、相手が怒って一言二言争ううち、ついに斬合を始め、木朽は右腕に傷を受けてしまった。他の者が黙って見ておられず、仲に這入ってようやく引き分けたが、木朽は深くこれを遺恨に思い、傷が癒ったならば再び果し合いをしようと覚悟をしていたが、三年経っても容易に癒らない。業を煮やした木朽は、相手に書を送って、傷が癒ったなら果合（はたしあい）する積りであったが、とても癒る見込みがない故、切腹して果てるから貴殿も腹を切れ、と申し送って死んでしまった。相手もしかたなく切腹したとは、さてさて厄介なつき合いをさせられたものである（当国見聞記）。